

現代短歌分類辭典

別名 現代短歌總索引

第五十四卷

現代短歌分類辭典刊行所 編纂

津 端 亨

津 端 亨 編 纂

現代短歌分類辞典

第五十四卷

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

現代短歌分類辭典

54

昭和五十六年七月十五日發行

定價一、七〇〇円

著者發行
兼印刷者

津

端

亨

東京都台東区烏越一―十一―八

發行所

現代短歌分類辭典刊行會

〒111

代表者

津

端

亨

振替

東京 三一九三一四

電話

八五一―九八六九番

目

次 (第五十四卷)

	歌数	頁数		歌数	頁数
あるーらむ	九三	一	あるーをーぞ	二	六九
あるーらめ	二	八	あるーをーば	五	七〇
あるーらめーど	一	〃	あるーをーも	二	〃
荒るる	三三	九	あるーんーだ	三	七二
生るる	七七	二七	あれ(我)	二六	〃
生るるーらし	二	三四	あれ(生れ)	二	七三
荒るるーらし	三	〃	あれ(生れ・動詞の連用形)	二〇	七三
荒るーれーど	二	三五	あれ(荒れ)	七八	七五
荒るれーども	一	〃	あれ(荒れ・動詞の連用形)	三	八二
荒るーれーば	二	〃	あれ(人名)	一	八三
あるーを	三九	〃	あれ	二一	〃
あるーをーさへ	一	六九	あれ(吾れ)	九	九二
あるーをーし	二	〃	あれ	四一	九三
あるーをーしも	一	〃	(か)あれ	二	一三〇

(かは)あれ
 (こそ)あれ
 (ぞ)あれ
 あれ
 生れ(名詞)
 同 (動詞)
 あれあと
 生れあいし
 生れありて
 あれあへる
 あれある
 あれあれ
 荒れあれし
 生れあれて
 あれあれにけり
 あれあれぬ
 あれいだしたる

一 一 一 一 八 三 二 一 一 一 三七 一 二 二 五 七 一

一四四 一四三 一四二 一四一 一四〇 一三九 一三八 一三七 一三六 一三五 一三四 一三三 一三二 一三一 一三〇

あれいづる
 荒れいづる
 生れいづるべし
 生れいできつる
 生れいでし
 荒れいでし
 生れいでしなり
 生れいでつ
 生れいでて
 生れいでにけり
 生れいでぬ
 あれいでましし
 あれいでましつ
 あれいでむ
 あれうし
 あれうちやまぬ
 アレウト

一 二 一 八 一 一 二 二 二 二五 一 一 二 二 一 一 一 一 一 一

一四四 一四五 一四六 一四七 一四八 一四九 一五〇 一五一 一五二 一五三 一五四 一五五 一五六 一五七 一五八 一五九 一六〇

あれしやう
 生れーしーや
 生れーしーより
 生れーしーを
 あれーず（終止形）
 荒れーず（連体形）
 生れーず
 あれーすぎーし
 荒れーすさびーたり
 荒れーすさむ
 あれーずーば
 あれその
 荒れーそめーし
 生れーそめーし
 荒れーそめーつ
 現れーそめーぬ
 あれぞら

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

三三 〃

あれーた
 あれた
 あれーたき
 あれーたし
 あれーたたみ
 荒れーたち
 あれーだちーし
 荒れーだちーて
 あれーだちーけり
 荒れーだちーゆく
 荒れーだつ
 荒れーたてて
 荒れーたまひ
 現れーたまひーけり
 あれーたまひーし
 荒れーたまひーたり
 生れーたまひーたり

二 一 三 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

三三 〃

生れーたまひーたる
 生れーたまふ
 あれーたらーむ
 生れーたり
 荒れーたり
 生れーたりーき
 荒れーたりーし
 生れーたりーと
 荒れーたりーと
 生れーたる
 荒れーたる
 荒れーたるーが
 荒れーたるーさへーや
 荒れーたるーに
 生れーたるーは
 荒れーたるーも
 荒れーたるーを

一 三 一 五 三 一 一 一 三 一 二 一 二 一 一 一 一 一 一 一

二六 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二

あれーたれ
 荒れーたれ
 荒れーたれーど
 生れーたれーば
 荒れーたれーば
 荒地
 あれちの
 あれちのぎく
 あれちはら
 あれーつ
 生れつきいます
 荒れつきーし
 生れつきーきたる
 生れつきーし
 生れつきーて
 生れつきーにーけり
 生れつぐ

一 三 六 二 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

二七 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二 二

荒れーづく	四	二五
荒れつくしーたる	一	〃
生れつぐーらむ	一	〃
荒れづけーば	一	〃
生れつげーる	一	〃
あれつち	四	二六
あれつちおも	一	二七
生れーつつ	一五	〃
荒れーつつ	二〇	二八
荒れーつつーか	一	二〇
生れーつつく	一	〃
荒れーつつーも	四	〃
荒れーつーらむ	二	二七
生れーて	二〇	〃
荒れーて	一六	二八
あれーてーけり	一	三〇
あれでら	三	三〇

合 計

三、九七五 首

「資料カード五七五、三〇〇首の内より」

荒れーてーる	一	三〇
生れーてーより	一	〃
あれーと	九二	〃
あれーど	五四六	三二

あるーらむ【動詞・助動詞】

明日は明日の日があるらむを過ぎゆきし今日を愚かに寝て繰返す

逢見なば君もおのれもあらざらんばかりありて見ずてあるらん

青松の蒼さに晴るる雪よりもいや清かるは誰れにあるらん⑤

あはれなる廊の裏のかきつばた夕さり覗く目もあるらむか②

意識せぬ夜々^{よひよ}の夢あるらむと心はあやし夜半にめざめて①

いたいけの片手かざして笑める子のいくつになりし年にかあるらん①

生けるほどは花に眠りて過^すしけり今日さめゆくは夢にかあるらん①

いとし子を黄金にかへてうかれ女にやるちふ親は鬼にかあるらん⑥

いばらきの東の海は明けたらん子等はまだし夢にあるらん（放庵歌集）

いなびかりほのめく方や雲幾重しづかに秋の立つにあるらん①

伊予の海にて泊ててふけゆく夜の船に泣く子あやなし姉あるらむか②

あるーらむ

大岡 博

堀口 大 學

太田 水 穂

北原 白 秋

佐藤 佐太 郎

太田 水 穂

與謝 野禮 巖

島 木 赤 彦

小 杉 放 庵

野 沢 柿 茸

橋 田 東 声

あるーらむ

海の遠に夕雲つららく国土のはてつつ更に国あるらむか

おく山はいかにやあるらんおもほえず色まだあさき庭のみぢ葉③

かきくらしふる白雪はあらたまの手たつけかもしらずやあるらん①

霧明りかくおぼろなる土の上にとほく別るる人やあるらん(馬鈴薯の花)

かかる夜も丘の修女はおもひなくあるらむか虫の声のさびしさ②

雲きれて露はれいづる岩肌はいかばかりなる山にあるらん⑤

事すでに今は終りてあるらむと燃ゆる彼方に挙手の礼する(支那事変
戦地)

心あらばみづからを咎めてあるらむと折々におもふ地境にきて④

これの世に離ればなれに生き居りてつひに忘るる日もあるらむか①

白玉のはちすのうてな冷やかにあるらん人のおもかげに立つ②

すみやかに歩らざるは辛くして妥結を遂ぐるこゝろあるらむか①

草にさす雨夜の月の薄明り螢と見るは露にかあるらん①

土 原 文 明

樋 口 一 葉

樋 口 一 葉

島 木 赤 彦

藤 田 と み 子

太 田 水 穂

佐 藤 完 一

鹿 兎 島 や す ほ

加 藤 淘 綾

安 江 不 空

野 村 清

與 謝 野 禮 巖

五月雨の川流れこす燕子花水隠れて咲く花もあるらん①

咲きのこる花やあるらん庭の面の青葉がぐれに鶯のなく②

潮さむき芦間に鳥のうき渡して幾わびまちし春にあるらん①

その市を西にさかりて川をこえていづくに行かす君にかあるらん①

たはやすく今の時世にあらはれぬ名をこそおもへ思ひてあるらん④

玉乗りの五色の玉のいくめぐりめぐりし世にかあるらん②

月かげに夜をふかさすは時鳥いまの初音をきかずやあるらん①

ちはやぶる神の忌垣に咲きつれば花のさかりもなびくやあるらん①

詰めくれし弁当に何があるらむと石の上にひらく足柄のみね⑬

時折は人もやわれが思ふごとく今もしのぶることあるらむか①

時つぐるかねにやあるらむほのぼのとあけゆく空にひびきけるかな①

ときわかぬ谷ふところの松が枝はわが経し年もしらずやあるらん⑤

あるーらむ

正岡子規

樋口一葉

芥川徳郎

太田水穂

太田水穂

中原綾子

樋口一葉

樋口一葉

松村英一

中井コッフ

昭憲皇太后

樋口一葉

あるーらむ

飛びもあへず又立ち戻り木のうれに驚ぞかが鳴く巢もやあるらん①

正岡子規

遠ざかりみるに光のまされるはみがきおほせし玉にやあるらむ②

明治天皇

なぞや斯く法師は悲しくあるらむと南の房はなげき給へり⑬

釈迢空

鳴る神の響の灘の夕立に笛も葺き敢へぬ船やあるらむ①

落合直文

にが笑してあるらむか君が歌彫られてありと君が知りなば

尾上柴舟

日本語も今は清しくあるらむと海渡り吾が帰り来にけり①

小暮政次

ぬば玉の夜をしもいねぢありたし案山子はたれを恋ふにかあるらん①

太田水穂

背景に花ちりばめて自らを描きしアルルのゴッホよゴッホよ④

宮 柊二

袴着の日にやあるらむうぶすなの神まうでする稚児ぞおほかる①

昭憲皇太后

はたつづき棚結ふみれば梨の実のおほくなりいづるさとにやあるらむ②

明治天皇

花火みる舟こそつどへ大川のかはびらきする夜はにやあるらむ②

明治天皇

春かぜはいかにふきてか梅のはな咲けるさかざる花のあるらん①

樋口一葉

春深くなりぬといへど青森の里にすむ民さむくやあるらむ①

はるばるに家さかり来て秋づくや田居の伏屋になきてかあるらん①

人みなの手にならされて世の秋を翁はいまだしらずやあるらむ①

二荒山たきのした水くむ人はけふのあつさも知らずやあるらむ②

深々と雪を被ぎし家の内まともあるらん火影明るし②

冬木立つ厚見の田居の上遠く飛び行く鳥は鴨にやあるらむ

ふるさとの庭にあさはきはむかしわがはなちし鳩のひなにやあるらむ①

故郷を遠くはなれていくさ人花のさかりもしらずやあるらむ②

ほがらほがら明け放れゆく大空のいづくよりくる年にかあるらん①

ほととぎす都に鳴くは多摩山の若葉をこふる声にやあるらむ

額つけて川見る心馴れ来つる窓の硝子も知らずやあるらむ⑥

また見じと人しかすがに思はずであるらん我れの衰へて行く⑫

あるーらむ

明治天皇

太田水穂

昭憲皇太后

明治天皇

今井よしの

柘植潮音

昭憲皇太后

明治天皇

太田水穂

貞明皇后

尾上柴舟

與謝野晶子

あるーらむ

まだ知らぬ世をゑまひ見る玉盤によきこと盛られあるらむがやう② 九條武子

真平手に掌を拍ちあはせ澄める音のいつ聞き得べきわれにかあるらん⑥ 岡本かの子

水おとも近くきこえてとぶほたるゆくは野川の上にやあるらん② 樋口一葉

蜜柑の花蜂うならしてあるらむと遠く目をやる一つの谷に① 川浪磐根

みおくりの人のおほきは湊船とつくにさしてゆくにやあるらむ① 明治天皇

水無月のてる日にやけしまさごちを車ひく人あつくやあるらむ② 明治天皇

峯つづきみちぞつきたるしら雲のほかにもかよう人やあるらむ① 井上通泰

むつかしく一人あるらん旅の夜の我れを思ひて君もだすらん① 高橋英子

紫にさふらんの花けぶるかな光れる世界奥にあるらん⑭ 與謝野寛

めぐりあひて泣きみ笑ひみかたらふは幼あそびの友にやあるらむ① 明治天皇

もののねの屯のうちに聞ゆなりかちどきあげし日にやあるらむ 昭憲皇太后

もしや鳥木のしげみより見あるらん峽の草木はみだれかがやき① 宮沢賢治